

コンテンポラリー礼拝について

清野久貴

1. はじめに

近年の世界的なキリスト教礼拝における「流行」として、「コンテンポラリー礼拝」と呼ばれる新しい形式の「礼拝」をあげることができる。コンテンポラリー礼拝は、1960年代以降、急速な勢いで世界のキリスト教世界を席卷し、プロテスタント教会において中心であったMainline Churchとよばれる伝統的な教会の礼拝を凌駕しようとしている。日本において同様の事態が起きることが考えられ、それゆえ、根本的な問いとして「コンテンポラリー礼拝とは何か？」を考え、その上で、「導入の是非と方法」について検討する必要がある。この論文では、コンテンポラリー礼拝の定義と歴史について考察し、その議論を踏まえた上で、伝統的教会の礼拝におけるコンテンポラリー礼拝の導入について考えてみたい。

議論をはじめる前に、論者の立場を明示しておきたい。基本的に、コンテンポラリー礼拝を否定する意図はなく、むしろ現代文化における礼拝の在り方を考える時、また、Liturgical Movementの本質的方法論である多様性の許容という視点から、この現代の礼拝を肯定的にうけとめている。問題は、論者が奉仕する教会における導入の是非ということになるが、結論から記すならば「否定的」である。認めつつも否定するという「矛盾」に映るかもしれないが、多様性を許容する方法論に立つと考えられる事態である。この論文では、基本的

に「否定的」に考える理由について取りあげ、コンテンポラリー礼拝とは何かを考えてみたい。

2. 礼拝学の方法論

コンテンポラリー礼拝の議論の前に、現代礼拝学の議論にもとづく論者の方法論について短く言及してみたい。現代礼拝学の神学的議論の方法論は複数存在するが、「礼拝やLiturgyは各教会共同体の信仰理解が表現される場」¹⁾であり、礼拝と神学を含めた教会の伝統は相互補完的な関係にあり、²⁾ 礼拝は「イエス・キリストによる救済のプロセスへの参与」³⁾と考えている。それぞれの理解について議論すべきであるが、ここで取り上げる余裕がないため、これらの方法論の提示するだけにとどめておきたい。⁴⁾

ただし、後述する議論に関係するため、はじめの「礼拝が教会共同体の信仰理解を表現する」という方法論について補足説明をしておきたい。「教会共同体の信仰理解」を考える時、そこには「教会共同体の交わり」があり、「交わり」を守る共同体の構成員である教会員の存在がある。つまり、「人間の交わり」が、その表現には含まれているということである。教会に集う人々は、それぞれの地域の文化の中で生活をしており、その文化の影響を受けることは当然考えられることである。結果的に、教会共同体の交わりの中に、各地域の文化的要素が入る可能性は否定できず、礼拝が地域の文化的影響を受けることは想定されることである。「教会共同体の信仰理解を表現する」と考えた場合、純粹かつ普遍性を持った礼拝を考えることは難しく、たとえ礼拝に関する共通文書を作成したとしても、同じ教派においても多様な形が存在するのである。

日本のプロテスタント教会において、礼拝の方法論の「前提」として想定しなければならないことは、キリスト教礼拝は、その時代、その地域の文化的影響を受けるということである。問題は、その時代の影響を受けた礼拝が、聖書、伝統の視点から議論される時、イエス・キリストの啓示に相応しいかどうかということを検討しなければならないのである。言い換えるならば、イエ

ス・キリストの啓示は「ひとつ」であるが、その後の教会の歴史の中で考えられ、実践されてきたことは文化的「解釈」のもと行われてきたのであり、生きた伝統として変化し続けてきたということである。

3. コンテンポラリー礼拝の定義

コンテンポラリー礼拝は多様かつ広範囲にわたる礼拝形式をもつため、「定義」の議論が難しいのであるが、北米の礼拝学者Lim & Ruthは次のように考えている。いくつか定義が記されているのであるが、要約すると、コンテンポラリー礼拝とは、音楽を中心とし、会衆の日々の歩みの現代的課題や関心事に直接的にアプローチする礼拝や営みを守り、現代の電子技術を最大限利用する礼拝であると定義している。⁵⁾ また、「コンテンポラリー礼拝」という呼称について、世界的に広く用いられている表現方法であるが、実際にコンテンポラリー礼拝を実践している教会において、別の名称が使用される場合がある。例えば、シドニーのHill Song Churchに代表されるPraise & Worship（以後、P&Gと略）、アメリカの新しい宣教論および教会論を提示したWillow Creek ChurchによるSeeker Service、他にModern Worshipといった名称が使用されている。⁶⁾

こうした複数の呼称から理解されるが、「コンテンポラリー礼拝」とひとことで表現したとしても、分類された中で多様な礼拝の内容や形式が実践されており、かなり自由かつ緩やかな方法論の中で礼拝が行われている。こうした理由から、コンテンポラリー礼拝の研究において礼拝の全体像やその本質を把握することが難しく、ここではLim & Ruthの研究を出発点として議論をすすめていきたい。

4. コンテンポラリー礼拝の歴史

Lim & Ruthは、コンテンポラリー礼拝には歴史的に三つの段階があると指

摘している。第一段階は1920年から1930年代で、「コンテンポラリー礼拝」という表現が、専門用語というよりも、ある特定の教会群が守っていた礼拝を指す際に使用されていた。⁷⁾ 本格的にアメリカの教会史に登場するのは1960年代以降であり、現代のコンテンポラリー礼拝と呼ばれる礼拝形式が登場した。新しい礼拝形式を守る人々が、自分たちの礼拝を「コンテンポラリー」と称し、この呼称が広く認知されるようになったのである。⁸⁾

キリスト教の歴史的視点から考える時、自分たちの礼拝に対し「コンテンポラリー」という表現を使用したことは重要である。なぜなら、自分たちの新しい形の礼拝と、他の伝統的な教会の礼拝を自覚的に区別すようになり、自分たちの礼拝に対しアイデンティティを持つようになったからである。もちろん、アメリカのキリスト教の歴史から考えた時、唐突にコンテンポラリー礼拝が出現したわけではなく、呼称が確定する以前から新しい礼拝形式が守られていたことは否定できないであろう。重要なことは、「分類する／される」ことで、伝統的教会の礼拝とは別の礼拝が存在することが認識されるようになったことであり、キリスト教の礼拝の歴史において、ひとつの大きな転換点となった時期といえるのである。

その後、コンテンポラリー礼拝は1960年代から70年代の黎明期をへて、1980年代以降に爆発的に発展し、世界規模で広まっていった。この発展の背景として、70年代に起きたペンテコステ運動の再活性化をあげることができる。後述するが、コンテンポラリー礼拝とペンテコステ運動の関係は深く、ペンテコステ運動の盛り上がりと同時にコンテンポラリー礼拝も飛躍的に普及し、その中で研究書や啓発書が飛躍的に増えたのである。⁹⁾ そして、2020年代に至る現在において、世界的に実践されている礼拝形式となったのである。

5. コンテンポラリー礼拝の「四つ」の起源

コンテンポラリー礼拝について、定義そのものが難しいゆえに、歴史的起源を想定することも難しいと言わざるをえない。そうした状況の中で、大きく四

つの起源を考えることが可能であろう。

第一の起源として、ペンテコステ運動を含めたアメリカの信仰覚醒運動以来の礼拝および信仰理解の影響である。¹⁰⁾ 特にペンテコステ運動との関係が指摘されているが、理由として賛美と聖霊論の影響を強く受けていると考えられているからである。議論の前提として、ペンテコステ運動における賛美について、アフリカ系の人々が文化として保持していた「口頭の儀式」の伝統の影響が指摘されている。¹¹⁾ 口頭の儀式では、文字ではなく歌や話法によって宗教儀式が守られるのであるが、キリスト教内のアフリカ系アメリカの人々が、この伝統の下、賛美を重視するようになったのである。ペンテコステ運動内の賛美を積極的に活用する礼拝形式が、コンテンポラリー礼拝にも影響を与え、礼拝の中心に賛美を位置づけるようになったのである。その代表的な教会としてP&Wをあげることができ、讚美歌は、伝統的な'Hymns'から、ポップやヒップホップの曲調を基調とした'Worship songs'へと変化し、その時代の音楽に近い賛美が実践されるようになったのである。

第二の起源として、礼拝の「担い手」をあげることができるであろう。コンテンポラリー礼拝を実践する主体は若者であり、教会の宣教および会衆の多くは、その時代の若い人々であった。¹²⁾ この文化的背景は、礼拝の営みそのものに大きな影響を与え、賛美には同時代の流行の音楽が取り入れられ、礼拝におけるドレスコードも若者の流行によって定められたのである。¹³⁾ この担い手が若者であったことの重要な点は、若者たちが使用する言語表現などが礼拝の中で積極的に使用され、それまでの伝統的教会において守られてきたものとは全く異なるものとなったのである。

第三の起源として考えられるのが、「アメリカ文化」そのものである。コンテンポラリー礼拝の担い手たちは、1945年から1960年代のBaby Boomerおよび1965年から1980年代のGeneration Xの若者たちとされている。¹⁴⁾ これらの世代は、朝鮮戦争、ベトナム戦争、ウッドストック、麻薬問題、家庭崩壊、人種対立など、アメリカの深刻な社会問題に直面した世代である。加えて、思想的な変化として「個人主義」的思想が支配的になっていった時代でもある。

Baby Boomer世代や X世代は、深刻な社会問題の中で嘆きと悲しみを経験し、そうした社会問題に教会も対応するように伝道の方法論が考えられたのである。こうした文化的背景によって発展したコンテンポラリー礼拝は、嘆きや苦しみを慰める宣教の方法論をとるようになったのである。

「個人主義」は、さまざまな面でキリスト教に大きな影響を与えた。「教会の世俗化」という表現で説明されるが、最も大きな影響は信仰の個人主義化である。宗教を公の場で語ることを避け、私的な場でのみ語られるというものである。こうした状況を克服するための議論や試みがなされてきたが、礼拝について考える時、個人の嗜好にあった礼拝を教会が考え、用意するようになったのである。公の礼拝というよりは、個々人が自分にあった礼拝を求め、教会が応じる形で同様の苦悩や境遇にある人々を集め、礼拝を守るようになるのである。

第四の起源として考えられるのが、ポストモダン思想の影響である。ポストモダン思想について議論する余裕がないため特徴だけ記すが、ポストモダン思想をひと言で表現するならば、「相対」、「細分化」、「複数の真理」などがあげられ、最もふさわしい言葉は「カオス」と「ネットワーク」であろう。こうした言葉に共通する理解は、絶対的真理や一致は幻であり、存在するのは「ある真理」を真理として信じるネットワークが複数存在するという現実であり、結果的に真理が相対化してしまうのである。この理解が、現代の「多様性」を支える理論的支柱になるのであるが、この思想がキリスト教礼拝に影響を与えたのである。教会において、一致したキリスト教礼拝というよりは、各教会共同体の交わりに相応しい形式で礼拝を守るという形になるのである。コンテンポラリー礼拝が多様な形を持つのは、伝統的教会が信仰告白、共通祈禱や共通礼拝で一致を目指す一方で、コンテンポラリー礼拝を実践する教会群では、教会間のつながりが緩やかであり、ある一定の「枠組み」をつくりつつも各教会の独自性を認めるというスタンスをとっているからである。¹⁵⁾

6. コンテンポラリー礼拝の特徴

コンテンポラリー礼拝について考えられる四つの起源について議論したが、この起源と深く関係し、重複する議論になるかもしれないが、ここでコンテンポラリー礼拝の特徴について検討してみたい。第一に、コンテンポラリー礼拝は、**American Evangelism**の大きな流れの中で生まれた礼拝であり、アメリカの文化的影響を強く受けていることをあげることができる。アメリカの実践主義的、個人主義的思想や方法論と礼拝が強く結びつき、伝統的教会がもつ制度や神学などの伝統から「自由」に礼拝を考え、実践主義的発想から会衆が受け入れ易い宣教の方法論が採用されたのである。伝統的教会が共通祈禱や共通礼拝を採用するのに対し、即興的な讃美歌の作曲やその時の会衆の反応にあわせた礼拝式次第の変更など、非常に自由かつ柔軟な方法論が採用されている。伝統的教会が週報や讃美歌集に従い礼拝を守るのに対し、コンテンポラリー礼拝ではプロジェクターなどを使用することで即興性が保たれ、その場の状況に応じて柔軟に対応できるようにするのである。

歴史的に見て、実践主義的方法論は、アメリカの信仰覚醒運動において **Finny** が採用することで成功を取っている。¹⁶⁾ こうした実践的な方法は継承され、現代のコンテンポラリー礼拝の雄である **Willow Creek Church** は、聖職者を含めたスタッフが、地域の人々の宗教に対する人々の「距離感」について真摯に研究し、いかにして未信徒を教会へと招き入れるかを考え、結果として **Seeker Service** と名付けた礼拝を実践した。宣教の方法論は、「キリスト教を知らない人々をいかに教会に招くか」であり、人々を「集める」ことを教会の宣教の方針の一つとしたのである。この方法論は **Marketing Approach** と呼ばれ、教会に人を集めることを主眼とし、教勢低下に苦しむアメリカの教会に採用されたのである。伝統的教会の宣教の方法論から考えると異質に映るが、北米における信仰覚醒運動以来展開されてきた、実践主義的方法論から考案されたという視点から考えると、コンテンポラリー礼拝の方法論は珍しいものでは

ないのである。

第二の特徴として、その時代の「若者」の文化の上に成り立っていることが考えられる。その時代にコンテンポラリー礼拝を担っていた若者が時と共に年齢を重ねるが、次の世代が礼拝を担うことで、その時代の最新の文化やIT技術などを貪欲に取り込むことが可能になるのである。そして、若者が担うゆえに時代の社会問題や関心事に敏感であり、この「敏感さ」は、説教を含めた礼拝の内容に大きな影響を与えるのである。より現実的な関心事に対する言及が多く、現実の社会や家庭における苦難に対し慰めが語られ、そして苦難に疲れた人々の「魂の救済」に焦点があてられるのである。アメリカにおいて、精神の安寧に焦点をあてた「スピリチュアリティ」が流行しているが、精神世界における安定が教会の宣教の中心に位置づけられ、礼拝がそうした宣教に適應するように営まれるのである。¹⁷⁾

第三の特徴として、P&Wに見られるように音楽に偏重した礼拝形式をあげることができる。この音楽を中心とする形式について、Lester Ruthは「現代の讃美歌から感情的な状態へと導き、会衆をLiturgyへと参与するよう導くアプローチ」と分析している。¹⁸⁾ 礼拝および音楽における特徴的方法論として、神に用いられる人称代名詞が三人称から二人称へと変えられ、音楽の曲調が現代的なポップな感じであり、曲の内容が神との親密さや交流などに焦点が当てられているのである。¹⁹⁾ 非常に情緒的かつ感動的であり、礼拝は熱狂的な「ライブ」会場となるのである。加えて、賛美への傾倒において評価できることであるが、結果的に、Liturgical Movementが目指した「会衆の参加」が賛美において実現されているのである。賛美を導くリーダーたちが存在するが、礼拝の場が賛美において熱狂的な「一体感」を持つことを可能にするため、その方法論の是非はあるが、結果的に会衆の参加を実現しているのは特徴的なことである。

7. コンテンポラリー礼拝の神学的背景とそれに対する批判

コンテンポラリー礼拝について考える時、その礼拝において表現されている神学的意義について批判的に考えてみたい。前提として、コンテンポラリー礼拝は、ある意味、その方法論として「パラダイムシフト」的な面をもっていると考えられるのである。礼拝の営みを「上から」ではなく「下から」考え、会衆が望む礼拝の在り方を模索したのである。結果的に伝統的な礼拝とは異なる営みとなり、しばし「礼拝ではなくエンターテイメント」と批判されることがあるが、会衆が参加し、会衆を「熱狂」させる礼拝が実践されるのである。

神学的議論で問題とされるのは、この方法論の是非ではないかと考えられる。礼拝が救いのプロセスであり、イエスの宣教を表現する場であり、神の国の福音が物語られる場であると考えられる場合、通常、伝統的教会が目指した「上から」の視点で礼拝を考え、実践することになる。一方で、礼拝は文化的営みであり、その時代の文化的影響を受けると考えられ、時代にあった礼拝の在り方を模索することで会衆の支持を集めたのがコンテンポラリー礼拝である。乱暴な表現かもしれないが、それぞれの方法論をひと言で言い表すとするならば、「神を喜ばせる」礼拝を実践するのか、それとも「会衆を喜ばせる」礼拝を実践するのかとすることができるであろう（もちろん、コンテンポラリー礼拝側の考え方として、賛美を通して神を喜ばせていると主張することは考えられることである）。

礼拝の議論から逸れるが、こうした「上から」と「下から」の方法論の議論を理解しやすくするために、「下から」の方法論の代表格である「解放の神学」について取りあげてみたい。解放の神学は、南米の大司教ロメオによって提唱された神学であるが、最大の特徴は民衆の苦難や嘆きに対し教会がいかにアプローチするかを考えた点である。実際、大きな影響を与え、「社会不正義」という制度的な悪があることを指摘し、教会の営みに会衆が参加できるように努力したのは解放の神学の「果実」である。しかし、解放の神学の最大の問題

は、会衆の現実を見るあまり、「今」の苦難からの解放を主張し、神の国の希望という救済論が希薄化されることになる。加えて、その地域の民衆に焦点をあてるため、普遍的視点を持つことが難しいのである。²⁰⁾ この問題点がコンテンポラリー礼拝についても言え、コンテンポラリー礼拝は北米の文脈の中でうみだされ、どの程度まで普遍性を持つか疑問なのである。伝統的教会が公同性や使徒性を追求する理由は、それが世界的・普遍的な救済論が教会において保たれる信仰理解を実現しようとするからであり、共通祈禱や共通礼拝を作成するのは、礼拝において普遍性を表現しようと努力するからである。アメリカの文化的背景からうまれた礼拝を批判する意図はないが、重要なことは、北米のコンテンポラリー礼拝を、全世界の教会が無批判に受け入れることの是非である。また、受け入れたとして、礼拝の大原則である、その教会が信じている救いを、コンテンポラリー礼拝において表現できるのかを議論すべきなのである。²¹⁾

加えて、会衆を集めることに焦点をあてるあまり、キリスト教礼拝の本質が喪失される可能性が考えられるのである。キリスト教礼拝の本質は、イエスが守った礼拝に参加することであり、神の恵みが伝えられる礼拝を守ることである。決して、会衆の喜ばせるだけの礼拝ではないはずであり、神が喜び、その喜びを会衆が共有するという「上から」の視点が失われてはならないのである。

第二の問題点であるが、コンテンポラリー礼拝は、アメリカの文化的影響を受けているがゆえに、個人主義的、人間中心主義的思想の影響を強く受けているという点である。非常に興味深いアメリカ社会における宗教観の研究書として、Robert N. Bellam, Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler and Steven M. Tiptonらによる *Habits of the Heart* がある。この研究書の中で、アメリカ社会には2億2千万の人口にあわせた2億2千万の神がいると指摘されている。²²⁾ この指摘に従えば、礼拝においてイエス・キリストについて語られ、信仰が告白されるのであるが、個人の救済理解や神理解が存在し、その理解にあった教会の礼拝や伝道の方法論が求められ、教会側が会衆のニーズに合致す

るものを用意するようになるのである。

また、コンテンポラリー礼拝の神学的背景として、「人間の自由意思」の問題がある。神と人間の関係について語る時、神の支配に言及されるのであるが、一方で、人間の自由意思を積極的に認めるのである。例えば、近年ではナラティブ神学にもとづく Pinnockらが提唱した *Openness* という思想が典型的なのであるが、人間の日々の営みにおいて人間は自由に選択をし、神は人間の自由意思に対し「助け手」としてのみ存在するのである。こうした神学的理解は、アメリカでは決して珍しい議論ではない。実践主義的方法論が根底にあることから推察されるが、人間が選択し、そして、実践することが重要なのである。それが成功するか失敗するかは、試みることではじめてわかることであり、そのリスクは取り続けるのである。この理解がキリスト教の信仰理解として取り込まれ、その信仰理解にもとづいて礼拝が実践されるのである。

伝統的教会の礼拝とコンテンポラリー礼拝を守る教会において、神学的視点から考える時、神理解について決定的な相違があると考えられる。伝統的なプロテスタント教会の理解では、「三位一体」なる神理解において、聖霊は「父と子から出る」というのが基本的理解である。確かに、近年の傾向として、聖霊の従属的理解を克服するための神学的議論が重ねられ、より独立した位格としての位置づけが主張されている。コンテンポラリー礼拝はペンテコステ運動の影響を受けていることから、聖霊を強調し、聖霊の力により賛美への力をえるといった、聖霊を力もしくは敬虔さという賜物を与える神として、信仰の中心的な役割を担う神として位置づけているのである。ここで聖霊論に関する議論をする意図はないが、伝統的なプロテスタント教会の聖霊論とは異なる理解をもっていることだけ指摘しておきたい。²³⁾

第三の問題点は、「賛美」を中心とすることで起きる変化である。P& Wにおける賛美の理解について、Hill Song Churchでミュージシャンおよび伝道者として活躍していた Darlene Zschech は、賛美とは「宣言、勝利の宣言である。神が、あなたに与える場所に堅く立つために信仰を宣言するのである」としている。²⁴⁾ Zschechの言葉は、P& Wだけでなく、ペンテコステ運動やカリズ

マテック運動における賛美の理解をよく表現していると考えられる。プロテスタント教会の伝統的教会では、教会共同体が信じている内容を信条などの定型文に定め、告白する者の信仰を正しい方向へと導こうとしてきた。これに対し、P&Wでは、信仰告白の代わりに賛美において信仰を表現するということである。賛美を「神の恵みへの感謝の応答」としてだけでなく、より積極的に自分が信じている信仰の内容を表現するものと捉えているのである。

この賛美の理解ゆえに、二つの大きな問題点を指摘せざるをえない。アングリカンの礼拝学者 Brian Spinks は、'*lex orandi, lex credendi* ?' というテーマのもと、讃美歌の詞の内容について検討すべきと批判し、²⁵⁾ 英国の Nick Page は、讃美歌の詞が意味を成していないものがあり、加えて、個人の願望や利益だけを願う賛美がなされると批判している。²⁶⁾ 人々の苦難にこたえる神の姿や、人間同士の恋愛のような「ロマンティック」な内容により、「神と自分」に焦点をあてた賛美歌がつくられ、三位一体や教会に関する視点が希薄になってしまうのである。こうした状況の下で危惧されることは、讃美歌が人間に与える影響力である。人間は歌を愛し、歌う存在であるゆえに、繰り返し曲を歌い続けることによって内容が定着し、ある意味、その人の信仰形成や人格形成に影響を与えることになりかねないのである。もちろん、伝統的な讃美歌の在り方を大切にしつつ、現代的な讃美歌との融合に取り組んでいる、イングランドの John Ratter や Graham Kendrick のように聖書の言葉を詞にし、伝統的な信仰理解にもとづいて作詞をする作曲家が存在する。しかし、全体的に神との親密さや一神教的な神理解、神と個人に特化した詩など問題が存在するのである。²⁷⁾

加えて、日本のプロテスタント教会ではほとんど議論されることのない、礼拝におけるリーダーシップの問題がある。要は、「誰が礼拝を司るか？」という問題である。プロテスタント教会では、これを召命による Ordination（叙階もしくは日本基督教団の表現では准允および按手）において問題を解決しようとした。議論の詳細は避けるが、召命に土台をおくことで、三位一体なる神の権威と導きの下、礼拝を司ると考えたのである。コンテンポラリー礼拝

では、最も重要なのは音楽監督である。会衆の雰囲気を読み取り、聖霊の力および導きにより感動もしくは「熱く」なるように、非常に柔軟に礼拝の構成を考え、時に即興的に音楽を作曲するのである。もちろん、音楽監督も神学的訓練を受けているゆえに、伝統的教会の聖職者と同じであると考えられることは可能である。しかし、「神の言葉」は誰が語るものであろうか。もちろん牧師は会衆の中に存在するのであるが、どのような神の言葉が語られるのであろうか。加えて、そもそも「神の恵み」は賛美において伝えられるのであろうか。礼拝のリーダーシップの問題は、救済論の問題でもあり、この点、コンテンポラリー礼拝に対し批判的にならざるをえないのである。

最後に問題として指摘したいことは、コンテンポラリー礼拝全般に見られる宣教の方法論への疑問である。Seeker Serviceはキリスト者の獲得を目指し、そのために教会の営みを「適応」させる方法論を考えしたが、基本的には、コンテンポラリー礼拝全般に福音伝道への強い意識があり、信徒を獲得することを教会の使命としている。この方法論を考える時、会衆を洗礼へと導き、信徒を多く獲得することが正しい福音理解であり、教会の礼拝理解であり、宣教理解なのかということである。率直に記すならば、「教会員を増やすこと「だけ」が正義なのか？」という問いである。礼拝は、聖なる場において聖なる営みとして守られるものであり、会衆が喜ぶエンターテイメントとして守られるライブ会場ではない。礼拝は神の恵みが伝えられる sacramental 的営みの場であり、人々を感動させ、熱狂させ、「いい気持ち」にさせる場ではない。こうした問いには、コンテンポラリー礼拝側からの批判や答えが提示されるであろうか、根本的な方法論の違いを解決できる答えを見いだすことは難しいであろう。

8. コンテンポラリー礼拝への取り組み

伝統的なプロテスタント教会は、コンテンポラリー礼拝への取り組み方をどのように考えたらよいのであろうか。前提として、基本的な礼拝の *Ordo* を守

り、イエス・キリストの啓示および使徒的教会の伝統から外れるものでない限り、多様な礼拝のスタイルは認められるべきである。なぜなら、礼拝とは文化的営みであり、その文化が異なれば、礼拝も変わる可能性があるからである。

コンテンポラリー礼拝および伝統的教会の礼拝共に、イエス・キリストの礼拝を守るという点では共通しているが、礼拝を考える上で方法論に明確な違いがあり、結果的に「礼拝」と表現されるが、礼拝についての内実と解釈は異なるものと考えられるのである。それゆえ、伝統的教会およびコンテンポラリー礼拝を守る教会の双方が、互いに批判するか距離を置くことになるのである。実際起きている「対立」の状況の中で、いかにして「共存」し、そして相互により影響をしあえるのかを考える必要がある。

多くの研究者が、伝統的教会の礼拝とコンテンポラリー礼拝に代表される礼拝形式の対立について言及し、その中でひとつの礼拝の中に二つの礼拝スタイルを共存しようとする試みがなされてきた。²⁸⁾しかし、この二つの礼拝の相克は、現象として「礼拝戦争」として映るが、その内実としては「文化戦争」ということが可能であり、そして神学的方法論の対立とすることもできるのである。それゆえ、基本的に一致は難しく、一つの礼拝の中で共存することは部分的には可能かもしれないが、全体として難しいと言わざるをえない。また、「関心を持つ」ということで考えると、伝統的教会がコンテンポラリー礼拝に対して関心を持つと考えられるが、コンテンポラリー礼拝側が伝統的教会の礼拝スタイルに関心をもつことは、実践面で有益となると考えない限り考えられないのである。それゆえ、「取り組み」ということを考える時、伝統的教会が、コンテンポラリー礼拝にどのように取り組むかが問題となるであろう。

伝統的教会がコンテンポラリー礼拝に対峙する時、自分たちの礼拝を変化させるというよりも、自分たちの礼拝が何かを考える機会となるであろう。例えば、会衆が望むものに答えることは伝統的教会でも考えることであり、その模索した答えを礼拝に反映させることは重要である。コンテンポラリー礼拝が会衆のニーズに合わせて、様々なことに取り組んできたことは評価でき、そうした礼拝の研究を通して伝統的教会に何が欠如しているのかを知る機会となるで

あろう。また、コンテンポラリー礼拝の方法論について研究する時、伝統的教会の礼拝が、自分たちの良さである「神から」の視点で、いかに礼拝を守るのかを考え契機となるであろう。

次に、実際に教会の営みの中に導入することは可能かということであるが、解答としては「Yes」であろう。コンテンポラリー礼拝は、その方法論において人々を教会に招き入れることを目的としているため、もし、伝統的教会の側で教勢の低下などの問題を即時的に解決したい場合、「住み分ける」形で同じ教会の中で行うことは可能である。そうして教会に集められた人々が、コンテンポラリー礼拝を守るだけでなく、キリスト教の儀式的礼拝を求める時、自分たちが毎主日に守っている礼拝へと導くと考えられるのである。また、部分的に導入するか、混合する形で礼拝を守るという形も考えられ、実際、多くの教会が試行錯誤しながら主日礼拝の中で実践しようとしている。コンテンポラリー礼拝へ完全に変化するというよりは、礼拝の営みにおいて部分的に受容するという方法論が採用されるのである。

9. おわりに

ここまでコンテンポラリー礼拝について考察を記した。実際、礼拝を学ぶ者として、おそらく今後の礼拝の大きなトレンドとして、コンテンポラリー礼拝が世界のキリスト教礼拝、特にプロテスタント教会の礼拝の「主流」となることは間違いないであろう。なぜなら、コンテンポラリー礼拝は、その時代の文化的要素を柔軟に取り入れ、その「賛否」は別にして、進化し続け、「大衆受け」しやすい礼拝だからである。よりLiturgyへと焦点をあてる礼拝刷新運動でさえ、「多様性」がひとつのテーマであり、コンテンポラリー礼拝は、世界規模でキリスト教会が模索している多様性の先駆者として走り続けることになるであろう。教会の宣教の視点から考えると、教勢低下が叫ばれる中、最も会衆を集めているのがコンテンポラリー礼拝である。会衆のニーズに焦点をあてたMarketing Approachを採用することで、その方法論にもとづいて教会に人

を集めるゆえに成果をあげているとすることが可能なのである。こうした点を総合的に考える時、コンテンポラリー礼拝は、今後も発展し、世界のキリスト教礼拝の流れをつくると言えるであろう。

そうした状況の中だからこそ、(悪足掻きといわれるかもしれないが)最後に疑問を提示することでおわりの言葉としたい。コンテンポラリー礼拝を導入しようとする教会に問いたいことは、「コンテンポラリー礼拝の方法論において、会衆は救済されるのであろうか?」ということである。神の恵みが伝えられる sacramental 的礼拝の営みにおいて、教会の中でキリスト者へ救いは伝えられるのである。三位一体なる神の救済が Reality (現実存在)をもつ礼拝でなければならないはずなのだが、会衆のニーズにあわせた会衆の喜ぶエンターテイメントの礼拝において、神の救済は現実化するものであろうか?

礼拝学の研究者たちは、伝統的教会とコンテンポラリー礼拝の対立を文化的側面にとらえようとするが、「救済論」の枠組みでも考えるべきである。会衆のニーズにあわせ、苦難の中で慰めを語り、エンターテイメントによって会衆に「今」の熱狂と喜びを与える方法論と、終わりの日に目を向け、今の時をイエスへの信仰において忍耐し、イエスの歩みを実現しようとする方法論とでは、はたしてどちらが神の国へと入場できるのであろうか? さらに、この対比は教会論にも影響を与え、教会とは「人を集めることが宣教の場」なのか、「イエス・キリストの宣教に参与し、神の国へと入る神の子たちを集める場」なのかを問うべきなのである。

コンテンポラリー礼拝を導入する教会が日本でも増えているが、その状況を批判する意図はない。しかし、導入する教会は、自分たちの教会の存在理由、礼拝の定義について議論し、その上で取り入れるべきである。北米やアジアで「人が集まっているから」という理由で導入するのはあまりにも拙速であり、礼拝論、宣教論、教会論、神論、救済論のすべての視点から導入を議論すべきである。コンテンポラリー礼拝の急速な拡大は、わたしたち教会の存在理由、礼拝の意義を問うているのである。

(せいの・ひさたか)

注

- 1) Irwin. Kevin, *Context and Text : method in liturgical theology*, A Pueblo Book, 1994, p.6
- 2) See, Wainwright. Geoffrey, *Doxology : The Praise of God in worship, Doctrine, and Life*, Oxford University Press, 1980
- 3) von Allmen. J. – J., (tras) Knight. Harold, *Worship : its Theology and Practice*, Lutterworth Press, London, 1965, p.146
- 4) 拙論「lex orandi, lex credendiの解釈」(『伝道と神学 10』(東京神学大学総合研究所、2020年)掲載) 参照
- 5) Lim. Swee Hong, & Ruth. Lester, *Lovin' on Jesus : A Concise History of Contemporary Worship*, Abington Press, 2017, p.2-3
- 6) ibd, p.12-14
- 7) ibd, p.7
- 8) ibd, p.7
- 9) ibd, p.8
- 10) ibd, p.17
- 11) Hallenwegner. Walter J, *Pentecostalism : Origins and Development Worldwide*, Baker Academic, 1997, p.18
- 12) Lim & Ruth, p.17
- 13) ibd, p.17
- 14) ibd, p.19
- 15) 「各教会独自の宣教や礼拝の方法論」は、会衆に焦点をあてるコンテンポラリー礼拝にとって重要な要素と考えられるであろう。北米は広く、大都市と地方、東部と西部で文化的背景や社会状況が異なるため、会衆の社会的関心事に焦点をあてる宣教の方法論のため、それぞれお地域において礼拝の形式や内容も異なることが考えられるのである。
 コンテンポラリー礼拝やペンテコステ運動から再認識させられることは、地域の文化的相違によって、教会の宣教や礼拝の方法論に違いがうまれる可能性があるということである。例えば、日本において、東京と地方では教会が置かれている状況は異なり、宣教の方法論について同じ土俵で議論することが難しい可能性があることが考えられる。教会の伝統における一致が主張される一方で、地域の文化的背景の相違から宣教や礼拝の方法論が異なることは十分に考えられるのである。

- 16) Ross, Melanie C, *Evangelical Versus Liturgical ? : defying a dichotomy*, Wm. B. Eerdmans Co, 2014, Grand Rapid, p.12
- 17) 具体的には、証しの会などが好例であろう。病気の回復、失意からの再起、依存症の克服などが自身の信仰体験と重ねあわせられ、いかに神によって救われたかが語られるのである。そして、同じ苦悩を共有する人々と共に証しを通して神を賛美する時を持つのである。
- 18) Ruth.Lester, ' Praise-and-Worship Movement' in (ed) Bradshaw. Paul F, *The New SCM Dictionary of Liturgy and Worship*, SCM Press, 2002, p.379
- 19) ibd, p.380
- 20) See, Grenz. Stanly J, & Olson. Roger E, *20th-Century Theology : God and the world in a transitional age*, InterVarsity Press, 1992, p.222-224
- 21) こうした議論は、キリスト教の「グローバル化」の問題として受けとめることが可能であろう。教会の宣教の方法論について、アメリカのキリスト教の方法論が世界に影響を与えている状況を説明する際に、社会学で使用される *McDonaldization* という言葉を援用する形で表現されることがある。アメリカの文化的影響の強さ、*American Evangelism* のもつ伝道力など複数の要素から、アメリカのキリスト教が世界に大きな影響を与えている状況が指摘されているのである。いわば、宣教や礼拝の実践における「アメリカ化」である。実際、日本においてコンテンポラリー礼拝を導入するということは、アメリカのキリスト教の方法論を日本に輸入するということである。この状況が、はたして日本のキリスト教にとって妥当かどうかということであり、きちんと議論すべきテーマである。
- 22) Bellam. Robert N, Madsen. Richard, Sullivan. William M, Swidler. Ann, and Steven M. Tipton. Steven M, *Habits of the Heart*, University of California Press, 2008, p.221
- 23) ただし、伝統的礼拝を守る教会が、コンテンポラリー礼拝を受容する場合、考えられることとして、自分たちの教会の伝統を大切にしつつ新しい礼拝を導入するというケースが考えられる。この場合、自分たちの神理解を守りつつ聖霊論を強調する方法論を実践するため、混乱はあるかもしれないが、基本的な神理解は変わらず守り続ける可能性がある。そのため、ひと言で「ペンテコステ運動の影響をうけたコンテンポラリー礼拝」といっても、その受容の状況や段階で、さまざまな神理解や神学が存在することは考えられる。こうした状況は、ペンテコステ運動が伝統的教会において受容される際に、カリズマティック運動と名を変えて認識されたことで、さまざまな思想的展開を

示したことと似ているであろう。

- 24) Zschech. Darlene, *Extravagant Worship*, BethanyHouse, 2002, p.52
- 25) Spinks. Bryan D, *The Worship Mall : Contemporary response to contemporary culture*, SPCK Publishing, 2010, p.113
- 26) Page. Nick, *And now let's move into a time of nonsense : Why Worship Songs are Failing The Church*, Authentic Media, 2004,p.59
- 27) 具体的な音楽の問題の例として、*You raise me up* (lyrics : Brendan Graham, Composition : Rolf Lovland) という曲について取りあげてみたい。この曲は北欧のミュージシャンが作曲した曲なのであるが、その詞の内容からキリスト教の集会などで歌われることがある曲である。問題は、この曲は、もともと男女関係を歌った曲であるという点である。それが、神と人との関係を表現していると考えられたため採用されたのであるが、率直に記すと「行き過ぎた」キリスト教側の反応である。コンテンポラリー礼拝はポップやロックを導入してきたが、三位一体なる神と関係ない曲までキリスト教の曲として受容するのは問題と言わざるをえないであろう。
- 28) See, Webber. Robert, *Planning Blended Worship : the creative mixture of old and new*, Abington Press, 1998,